

はしもとみおさん

(木彫り彫刻家)

「家族の肖像」を彫る

阪神・淡路大震災（一九九五年）で奪われた多くの命。その中には人に飼われていたペットたちもいる。獣医を夢見た少女は、震災を機に、動物たちの生前の姿を甦らせる彫刻家を目指した（作品の写真は、はしもとさん提供）。

現実を、記憶を、記録したい

——九月三十日に『はじめての木彫りどうぶつ手習い帖』（雷鳥社）が刊行されました。動物の肖像彫刻をつくりはじめた経緯から教えてください。

小さいころから動物がホントに好きで、よくかわいがっていたんです。でも私が九歳のときに、実家で飼いはじめたばかりのゴンくんという子犬が病気で死んでしまいました。それがとても悲しくて、以来、病気になる動物を助けたいと思うようになったんです。

それから将来の夢は獣医師。当時から絵や音楽は好きでしたが、彫刻家になって芸術を仕事にするなんて思いもしませんでしたね。

彫刻家を目指す大きなきっかけとなったのが、十五歳のときに経験した阪神・淡路大震災（一九九五年一月十七日）です。私の実家は兵庫県の尼崎市で、揺れがきたのは午前五時四十二分でした。

まだ薄暗い早朝、私たち家族はクルマに避難しました。そのときは、家族がみんな助かったと安堵していたのですが……。

だんだん明るくなってきて、車窓から見た街の風景

景はいまだに忘れられません。見慣れた街が変わり果てていました。

いえ、変わったのは街の景色だけではありませんでした。近所の家々で飼っていて、私もかわいがっていたイヌやネコもいなくなっていました。逃げたのか、揺れによる倒壊に巻き込まれたのか……。あとになって飼い主の方に聞いてもイヌやネコの行方はわかりませんでした。亡骸なきがらさえ見つかからない動物たちがたくさんいたんです。

寿命だったり、病気になったり、徐々に弱って一生を終える。普通の死は理解していましたが、地震による突然の死の意味はまったくわからなかった。ある日、ふと消えてしまった——そんな漠然とした感覚でした。そのときに思ったんです。獣医師になったら病気やケガの子たちを救えるかもしれないけれど、どうしようもないこともあるんだな、と。

同時にあらためて気づかされました。私が好きだったのは、動物がいる風景、動物の姿そのものだったんだ、と。

——将来を変える大きな体験だったんですね。どうしたら生きていた動物の姿を再現できるだろう



●はしもと・みお 兵庫県生まれ、二〇〇五年、東京造形大学美術学部彫刻専攻卒業。二〇〇七年、愛知県立芸術大学美術研究科彫刻専攻卒業。全国各地で個展を開催するかわら、絵本の制作も手がける。